安心感を与えられる存在に

丹波地域で2人目の女性消防士

藤井 恵美さん(26)　篠山市網掛

篠山市消防本部

丹波地域で2人目となる女性消防士として篠山市消防本部に勤務する藤井さん＝篠山市北で

昨年1月から12月12日までの火災出動件数19回、救急出動件数1793回―。激務の篠山市消防本部（篠山市北）で女性消防士として勤務する藤井恵美さん（26）＝篠山市網掛。救急搬送の現場で活躍する救急救命士でもある藤井さんは、これまで〝男の仕事〟と思われてきた職場に身を置き、奮闘すること6年。県内では朝来市に次いで8番目の面積（約378平方㌔㍍）を持つ広大な篠山市内で発生する災害に64人の消防職員とともに対応し、日夜、市民の安全安心を守り続けている。

（太治庄三）

「女性だから」甘えはない

職場の雰囲気アットホーム

丹波地域の女性消防署員は、藤井さんと同じ職場で1年先輩の畑詔子さんの2人だけ。「男性ばかりの職場ですが、特に不自由に思ったことはありません。職場の雰囲気もアットホームでやさしいでしまうこともあったというが、「今は気持ちの切り替えができるようになり、落ち着いて対処できるようになりました」。

「救急隊ってすごい職業」

多可郡多可町出身。福祉に興味を持っていた藤井さんに、転機が訪れたのは高校1年生のときだった。父親の具合が悪くなり119番。不安で慌てふためく家族のもとに救急車が到着し、救急隊の手早い処置を見ながら「助けてもらえる」と、大きな安心感を感じたという。その後、父親の症状は改善し、平穏な日常を取り戻した。「人の命を助ける仕事。救急隊ってすごい職業」。その時、救急救命士になることを決意した。

高校卒業後、救急救命士を目指して大阪の専門学校に進学。3年間、公務員試験対策や医療を中心に学んだ。

出張所の当番をローテーションしながら任務にあたっている。

「苦しいときこそ助け合う」

念願の消防士となり、新人研修を受けるため、三木市の県消防学校で半年間、規律の厳しい寮生活を送りながら、体力練成、消防活動に必要な基礎を習得した。「もともと運動は不得意。中学時代は吹奏楽部に所属し、高校でも運動はしていなかったので、学校での訓練は本当にきつかった」と振り返りつつ、「でも『苦しいときこそ助け合う』。その大切さと、仲間同士の絆を実感できた貴重な時間でした」と語る。

「いつ出動要請が下るかわからない緊張が続く職場ですが、搬送した患者さんが元気になられて、まちで偶然その姿を見かけたりすると、『良かった』とうれしさがこみ上げてきます。『助けてもらってありがとう』と搬送した患者さんが署にお礼に来られることもあります。そんなとき、やっぱりこの仕事を選んでよかったと思います」とほほ笑む。

「私が消防士になろうと思ったあの時の救急隊と同じように、私も市民の皆さんに安心感を与えられるような存在になりたいですね」。そう話すやさしい眼差しの奥に、固い決意を宿していた。

転機は父親の救急搬送

3連ばしごを建物にかけて、救出訓練をする藤井さん＝同

救急車の中で、ダミー人形を使った救急訓練を行う藤井さん＝同